

女子学生の自我同一性に関する研究

—自我の二指向性の観点から—

山本 里花*

A STUDY ON EGO IDENTITY IN COLLEGE WOMEN

—From the Viewpoint of two Directivities of the Ego—

Rika YAMAMOTO

The purposes of this study were to investigate the divergent phases of ego identity in late adolescent girls and try to grasp them developmentally from the viewpoint of the two aspects of ego directivity (by Neuman 1950). In analysis 1, a questionnaire was carried out by 160 college women. This questionnaire was derived from Marcia (1964)'s ego identity interview requesting descriptive answers mainly on 4 areas (sexual identity, reciprocal relation with her mother, a sense of value, life plan). The results suggested that the phases of identities in each area were closely related, and 7 patterns of inclusive identity were found. In analysis 2, the relationships between the phases of identity found in analysis 1 and the two aspects of ego directivity (unitedness-separativeness) were investigated. The results suggested the effectiveness of these dimensions to the grasp of the divergent phases in late adolescent girls, and it was clarified that "Achievers" were most advanced in these two aspects.

Key words : ego identity status, late adolescent girls, process of identity formation, two aspects of ego directivity.

問題と目的

Erikson (1959) による「自我同一性の達成」概念は、最も簡潔な形で“子ども”から“大人”への過渡期である青年期の発達課題を集約したものとして広く認められるところとなっている。周知のように青年前期には、性的・身体的側面でも、対人・対社会的側面でも動揺が大きく自我統合能力は低下しがちとなり、それに伴い葛藤や、さらには同一性拡散の危機的状態がひきおこされがちとなる。しかし Eriksonによればそれは、それまでの心的体制が新たな統合へ向かうため再体制化されていく上での必然的で Normal な危機であり、青年期の葛藤は、一般には成人期迄に職業及びイデオロギーを核として、社会的なものへと収束されるべき性質のものである。

* 大阪大学人間科学研究科 (Faculty of Human Sciences, Osaka University)

自我同一性のこういった側面に焦点をあて開発された、Marcia (1966) の同一性地位 Identity Status という類型概念とその決定に関する方法論*は、臨床的自我同一性

* 彼は同一性の心理-社会的基準として、Crisis (危機：役割の試みと意志決定期間)、Comittment (傾倒：人生の重要な領域への積極的関与)の2つをあげた。Marcia法では半構造化された面接法により、職業、イデオロギー(政治、宗教)の2領域に於ける両基準の有無・程度を評定し、それにより4つの Identity Status のいずれかに判定される(下表)。各地位の特徴については、Marcia (1966)、無藤 (1979)を参照。

Marcia 法による同一性地位とその基準

地 位	危機	傾倒	略称
Achievement 達成	有 り	有 り	A
Moratorium モラトリアム	最 中	奮闘中	M
Foreclosure 早期完了	無 し	有 り	F
Diffusion 拡散：危機前 危機後	無 し 有 り	無 し 無 し	pre D post D

概念を実証的に研究する上で、すぐれて有効性の高いものと目され、その後の同一性研究の発展を生み出す1つの大きな力となった (Bourne, 1978; 鐘他, 1984)。しかし Erikson や Marcia の自我同一性に関する理論は、対象として考えられたのが主に男子大学生であったことを含め、彼らの生きた社会文化的背景とも切り離せない関係にある。そこにこの概念の限界の存在が予想されないではない。特に女性への適用に際しても、後、性に関する領域が付加され (Marcia and Friedman, 1970) またその重要性が確認され、一方政治に関する領域は重要でないとして省略されることも多くなっている等、比較的柔軟に変更されながら、殊に最近多くの研究をうみだしているが、同一性地位については、危機の発達の意味が男性ほど一貫して認められないなど、なお不明瞭な点が多く、その理論のあてはまりにくいことが指摘されている (Bourne, 1978; Marcia, 1980; 鐘他, 1984)。ここで方法論的問題の1つとして、Marcia 法では領域間の地位評定がいかにか統合されて全体的同一性地位が決定されるのか、という基準が必ずしも明確でないことがあげられるだろう。それゆえ、例えば男女の同一性地位が比較され論じられる場合、異なる領域によってもやはり同様に全体的同一性が捉えうるのか、それを果たして Marcia の規定した性質と同様とみなしてよいかという点が、そもそもあいまいなままであると言わねばならないと考えられるのである。本研究ではまず青年後期女子の同一性地位について実証的に検討し、その様相を明確化することを試みる。さて、こうした女性の同一性の捉え難さの背景となる要因として、対人関係や親密性に焦点づけられた、いわゆる伝統的女性役割をめぐる問題が、自立と達成をその要素とする同一性課題と独立したもう1つの課題として存在することがまず指摘されよう (Josselson, 1977; 園田, 1981; Archer, 1984)。社会的には男女平等化がおし進められる一方、伝統的女性観が広く根強く存在することも事実であり (柏木, 1973; 東・小倉, 1986)、性役割についての価値観や規範の流動化と多様化は、ことに女性において著しいものがある。それは青年期における社会的自己定義に際し、意志し、選択する主体側の要因がより重要な意味を持つことになること、さらに、いかに生きるか、というその問いが、青年期以降もしばしば問い直されうる可能性をも持つことをも示唆するであろう。即ち青年期女子の自我同一性確立の問題は、社会システムの“自我”をこえた、選択する意志と主体性の中心である主観的、個別的な“わたし”という人格的内的成熟のレベルに焦点をあてて、初めてより明らかにされうるものと考えられるのである。青年期女子の同一形成に

関する研究は増えつつあり、女性の同一性形成の独自性、多様性、並びに性役割選択との間の有意な関連性等が様様に示されている (例えば O'Connell, 1976; Orlofsky, 1977; Hodgeson and Fisher, 1979; 秋津・伊藤, 1983)。これら諸研究は、しかしいずれも外在的視点からの、しかもその多くは静態的捉え方にとどまるもので、その問題が選択する主体の心理的内面的発達の問題とどう関わっているのか、という点を明らかにするものはほとんどみられない。そこで女性の心の発達ということについて、ここでは1つの試みとして、その独自の観点から論を深めた Neumann (1950) の知見を借りて改めて考察してみたい。

彼によれば女性は本来的に他者との一体性を保とうとする“母権的意識”を持つ。それは女性の自我発達の初期のプロセスが、母から分離することによって個性性を確立し、しかも同時にその母との同一視を通じて中核的な性同一性を確立する、という矛盾をはらむものであることの結果生まれる意識の傾向である。これに対し、未分化な一体感からの分離と個の追求に徹し、客観化、抽象化を指向する“父権的意識”は、近代文明社会で生きる上でやはり不可欠の意識である。彼は、この2つの意識態度間の葛藤がしばしば現代女性の葛藤の中核となっていること、しかしその二重性が女性の発達にとっては必然的なものであることを強調する。この意識自我の二面性についての彼の概念は、男女性をただ男性、または女性のみ存在する個有のものとしてでなく、無意識をも含めた自我全体の存在様式の二面性として捉えた Jung, Winnicott, Bakan 等の考察*と共通の視点にたつものとして理解されるものと思われる。この枠組みにおいて“二面性”とは本来相補的な、統合されるべき原理であり、Winnicott によれば男女の違いはその発達の様相の違いとして捉えられる (鐘1983)。こういった理論は非常に象徴的ではあるが、主体的存在としての自我の発達ということ考察する上で今なお示唆に富み、有効性を持つものと思われる。本研究は第2に、自我の指向性に関する Neumann の説を導入して、一体性 (Unitedness, 他者との結びつきの中に自己の存在を見いだすというあり方)・分離性 (Separativeness, 自他の明確な区別の上になりたつ個性の中に自己の存在を見いだすというあり方) という2つの次元を設定し、人間の内面性、主体性の発達という視点から、青年期女子の自我同一性課題解決の諸相とプロセスについて考察する。

* Jung, C.G. (アニマ：女性原理に従うもの, アニムス：男性原理に従うもの河合 1967, 氏原 1986 参照) Winnicott, W.D. (行為と存在の原理 鐘1984参照) Bakan, D. (COMMUNION 共同性と AGENCY 作動性 Block 1973 参照)

目 的

1. 青年後期にある女子学生の自我同一性について Marcia 法による従来の研究から明らかにされつつあるいくつかの主要領域に注目し、それらがどのように関連しあって全体的同一性の様相を規定するのか 個人間でのようなパターンが示されるかについて解明を試みる。
2. 1 でみられた同一性の諸相と、一体性・分離性の関連性を検討することにより、自我同一性形成のプロセスと個人間の相違を 心理—人格的内面性発達の面から考察することを試みる。

方 法

a 調査の対象

私立K短大保育科2年生25名 私立N短大幼児教育科2年生25名*, 国立N女子大学文学部・理学部・家政学部より110名(2回生29名, 3回生47名, 4回生34名)計160名, すべて20歳前後(18-23)の女性である。

b 自我同一性評定用質問紙

Marcia 式面接法をもとに、次のような内容の質問紙を作成した。なお、面接法を質問紙形式に変えたのは、なるべく多くの対象から情報を得たかったこと、面接者によるバイアスが避けられ、かつ書くことにより内省が促されることが期待されたこと、などの理由による。

1. [性][母との相互性][価値観][ライフプラン(職業領域に結婚に対する考えや計画についての内容を含めたもの)] 4領域それぞれの危機の有無と傾倒の強さを評定するための自己記述形式による質問項目で、各領域7—8問ずつ。女子を対象に行われた従来の諸研究を参考に主な領域として採用した。質問項目は主に無藤(1979), 小柳(1981), 園田(1981)を参考とした。(例([性]の一部)“今までのなかで女に生まれなければ(男だったら)よかったと思ったことはありますか”“それはいつ頃, なぜですか”)
2. [宗教][政治]それぞれについての態度を問うSCT形式の2項目(政治は一, 私にとって宗教は一)
3. 現在の充実感に関する2項目[生きがい](私の生きがいは一)[生活気分](現在の生活に対する満足の程度<満足 まあ満足 どちらかといえば不満 不満 より選択>, 及びその主な理由<自由記述>)**。

c 一体性・分離性尺度

山本(1987)による, US(一体性・分離性)尺度を用い

た。回答は, ちがう, から, あてはまる, までの5件法でそれぞれ0—4点として得点化する。分析の対象としたのはU尺度15項目・S尺度20項目。なお両尺度相互の独立性は確認されている(山本, 1987)。

b 実施期日と手続

四年制大学生については1985年10月及び1986年5—6月, 筆者が直接間接に依頼し, 後日回収した。自我同一性評定用質問紙について所要時間の記入を求めたところ, 1時間から1時間半が最多であった。短期大学では両校とも1986年5月, 授業時間を用いて一斉に, まずU・Sスケール, ひきつづき自我同一性評定用質問紙, の順で実施した。後者についてはできるだけ授業終了までの残り時間全部(約1時間)を使って記入するよう求めた。

結果と考察

分析1〔自我同一性の様相について〕

①領域別の評定と人数分布

四領域: 主に無藤(1979), 小柳(1981), 園田(1981)によるマニュアルを基にした評定のチェックポイント*に基づき, まず危機, 傾倒を評定し, ついでその組み合わせにより地位を決定する。予備調査の結果から[性][ライフプラン]の二領域の危機と傾倒のありかたにいくつか下位タイプを設けたため, それに伴い地位も Marcia 法を用いた他研究に比べやや細かいものとなっている。各領域の判定基準と地位, 概略並びにその人数を TABLE 1 に示す。ここでの結果からは特に[ライフプラン]で, M地位にあたる者の多いことが認められる($\chi^2=41.87$, $df=3$, $p<.001$)。例えば中西(1983)による看護科高校生及び医療短大生を対象とした結果と比較した場合, この傾向は本研究の対象の多くが直接的に職業と結びつくものではない学科を専攻する学生であったことから何等かの影響を受けていることも予想される。[政治][宗教]は, 肯定的, 中立的, 無関心, 否定的の4カテゴリーに, [生活気分][生きがい]の反応は, 園田(1981)等を参考にそれぞれ8カテゴリー**に分類した。[政治][宗教]については共に<無関心>が最も多く(政治: 39.8%, 宗教: 49.4%), 両領域に関する従来の知見(無藤, 1981; 園田, 1981; 高橋, 1984)をほぼ裏付ける結果といえよう。なおランダムに選んだ39名分のデータの各領域について***2名(1名は筆者, もう1名は心理学専攻の大学院生)の

* 附録参照

** [生きがい][生活気分]のカテゴリーについては FIG. 1 参照。

*** 予定した40名分(25%)中, 手違いにより1名分が省かれた。

* 実際はK短大より61, N短大より41の有効データを得たが, 四年制大学の被験者と合わせた年齢的バランスを考慮して, 25ずつランダムに選び分析の対象とさせていただいた。

** 以後 [] 内の言葉で各質問内容を表わす。

TABLE 1 領域別地位評定基準とその特徴・概略

領域	地位注1)	危機	傾倒	概略	人数
性	Aposi	有	有肯定的	女性であることを積極的、肯定的に評価している。性に関し安定した自己基準を持つ。一個人として自然に生きる。特に女を意識しない。性にこだわらず人間としてふるまう。受動的、消極的受容。“男より女の方が楽” 男であればより生きやすい。 危機の時期を殆ど経ていないようである点を除きそれぞれAの下位類型に準ずる。性に関する基準があいまい、もしくは伝統的モラルをそのまま受け継いでいるようである点が特徴的 自分が女性であることを改めて意識的に考えたことが殆どないようである。 女性であることに、否定的評価、アンビバレントな感情が強い。	27
	Aandro	有	有両性的		7
	Apas	有	有受動的		2
	M	最中	両価的		24
	Fposi	無 or 弱	有肯定的		48
	Fandro	無 or 弱	有両性的		3
	Fpas	無 or 弱	有受動的		20
	pre D	無 or 弱	無		21
post D	有	無	8		
母との相互性	A	有	有	母を一人の女性、人間として客観的に捉え直す過程を経、その上で肯定的同一視又は母は母(尊重)自分は自分、という関係性を築いている。	55
	M	最中	両価的	アンビバレントな同一視。母と自分の在り方の違いを受け容れるに達していない。	16
	F	無 or 弱	有	肯定的同一視を持ち、母との関係に殆ど疑問を持ったことがないようである。	53
	FD	弱 or 最中	無 or 両価的	危機はあいまいで、同一視は相対的に弱い。冷静で一定の距離を置いた捉え方。	14
	pre D	無 or 弱	無	殆ど意識的に捉えられたことがないようである。“空気がたいなもの” “よく考えたことがない”	12
	post D	有	無	ネガティブな同一視。母及び母との関係性に否定的感情が強い。	10
価値観	A	有	有	いくつかの検討を経て自分なりの価値観を表明できる。諸価値のかなり明確な順位に達しているようである。	44
	M	最中	両価的	いくつかの選択肢を本気で選択しているようだが、価値の優先順位決定にはまだ迷っている。	14
	F	無 or 弱	有	自分の意見として述べるにしてもあまり考慮したようではなく、選択肢模索の過程が殆ど認められない。	78
	pre D	無 or 弱	無 or 弱	本気で考えたことがない。	17
post D	有	無 or 弱	生きていく上で広い意味での希望を持たない。	7	
ライフプラン注2)	A:MC	有	結婚職業	職業と結婚生活両立志向の決定 いくつかの将来像について本気で考えてきており、例えその選択が親の意志のバリエーションである時も、危機を経過し自身で決定したようにみえる。	22
	A:*C	有	職業中心		6
	A:M*	有	結婚中心		3
	M1	最中(前期)	両価的	選択肢は比較的広く切迫していない } 職業を選ぶことの方に関心があり両親や社会の申請と選択が切迫した課題である } 自身の可能性や志向との妥協をどうにかして達成しなければと考えている。	28
	M2	最中(後期)	両価的		28
	AD	最中(防衛)	?	危機はあいまいで一応決定に達しているがそれは不安を先取りした防衛的なものようである。	8
	F:MC	無 or 弱	結婚職業	(傾倒型はそれぞれ } 決定の時期を全く経ていないかまたは短いとるに足らない時期を経Aの下位型に準ずる) } 過したに過ぎないようにみえる。他の人(特に両親)が影響を与えたり、子どもとしてそうなるよう意図したように将来像を選択する。	17
	F:*C	無 or 弱	職業中心		5
	F:M*	無 or 弱	結婚中心		15
	pre D	無 or 弱	無		将来についてまだ本気で考えたことがない、もしくは具体性、実現可能性が殆どない。
post D	有	無	無力感、諦観、運命論的見方。どの道を選んでも大きな違いはないし先のことはわからないとしている。	5	

注1) Marcia の設定した4地位<A: Achievement (達成) F: Foreclosure (早期完了) M: Moratorium (モラトリアム) D: Diffusion (拡散-pre: 危機前 post: 危機後)>の略称を意味する。

注2) A及びF地位の下位類型の略号は、M (marriage)=結婚; C(carreer)=職業を示す。即ち、<MC=結婚・職業両方への傾倒; *C=職業のみの傾倒; M*=結婚のみの傾倒>を意味する。

評定間の一致率を求めたところ全体平均では81.2%を得た。先行研究で報告される一致率(70-90%)に比べて一応満足し得る値と思われる。

②領域間の関連とパターンの抽出

4領域及び[政治][宗教][生活気分][生きがい]を要因(計8)、各地位類型をカテゴリー(計55)として林数量化Ⅲ類による分析を行い固有値の大きなものから第1根($\rho^2=.355$), 第2根($\rho^2=.295$)を抽出した。この第1軸を横軸に第2軸を縦軸にとり、各カテゴリーをウェイトに基づきプロットしたのが FIG.1 である。まず第1軸についてみると、マイナス領域で安定した同一性

の危機以前の状態が示され、プラス領域で同一性の危機を示す混乱や動揺の強くなっていることが読み取れる。また4領域の地位のみに注目すると、第1軸によりそれよりプラス領域のA, M及びPost Dとマイナス領域にあるF, pre Dとにわかれており、このことからこの軸は同一性危機の次元を示すと考えられる。ただしM地位のみを取り上げると[ライフプラン]のウェイトは、特に[性][価値観]に比して小さくなく、ここで抽出された“危機”が、“自己基盤の再吟味”といったより内面的に方向づけられた意味を持つものとして理解すべきことが示唆されると考えられる。次に第2軸について

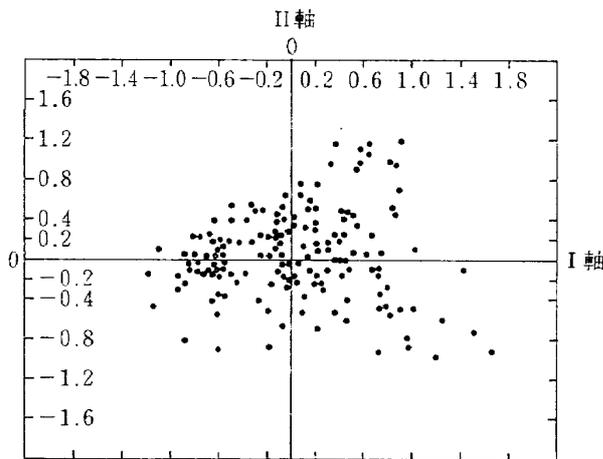


FIG. 2 第1軸, 第2軸に対するウェイトにもとづく個人の布置 (N=160)

えられる者の人数比は本研究の対象の中で相対的に多いことが推測される。

TABLE 2 U得点・S得点の平均値

学校・学年 (人数)	短大2 (50)	四年制2 (29)	四年制3 (47)	四年制4 (34)	全 (160)
U得点 (SD)	40.94 (7.468)	37.80 (5.958)	35.02 (8.444)	37.53 (7.413)	37.93 (7.948)
S得点 (SD)	39.69 (10.406)	39.03 (12.134)	40.96 (11.045)	43.00 (11.543)	40.61 (11.396)

分析2〔一体性・分離性について〕

①一体性・(U)・分離性(S)の測定

U尺度S尺度それぞれの合計点をU得点, S得点とした。両得点の平均と分散を TABLE 2 に示す。所属学年による一要因分散分析の結果, U得点に主効果が認められた ($F(3,156)=4.884 p<.01$)。短大2年生は, 四年制3年生よりも ($t=3.812 p<.001$) 四年制4年生に比しても

($t=2.009 p<.05$), U得点が高いと言える*。次いで尺度別の因子分析(主因子解→Varimax解)を行い, 解釈可能な4つずつの因子を得, 以下のように命名した。

U尺度<対人関係の円滑さ(U1)/社会的順応(U2)/選択的同化(U3)/他者受容(U4)>(TABLE 3)

S尺度<自己分離(S1)/社会的能動性(S2)/自己主張(S3)/未分化性の克服(S4)>(TABLE 4)

② 同一性構造との関連性

まず, U得点, S得点について上位, 下位の人数がほぼ25%となるよう得点の分岐点を決め3レベル(L・M・H)を設定し, さらに両得点レベルの組合わせ(USレベル)により対象者を9群(3×3)**に分けた。

始めにこのUSレベル一要因を先のパターン分析(分析1②)の際用いた8要因に加え, 再び分析したところ第1軸($\rho^2=.3318$), 第2軸($\rho^2=.2835$)及び両軸に対

* この結果からも本対象の集団均質性は否定されるが, 学校による対象の性質の違いが何を意味するのかは必ずしも明確ではないため, ここではむしろある年齢集団における個人差の表われとみなし, これ以降全データを一括して分析する。

** USレベル群分けの基準は次表の通り。

		S得点レベル		
		L ($x<35$)	M	H ($x>41$)
U得点レベル	L ($x<36$)	LL (11)	LM (22)	LH (13)
	M	ML (18)	MM (35)	MH (17)
	H ($x>51$)	HL (12)	HM (22)	HH (10)

* [] は得点の分岐点。

() は人数を示す。

TABLE 3 一体性(U)尺度 因子分析結果 (VARIMAX 回転後上位4因子の負荷量)

No.	項目の概要	U1	U2	U3	U4
1	私はとても話しやすい人間のように自分でもそうおもう。	.86	.12	.06	-.16
2	容易に新しい友達をつくらることができる。	.71	-.06	.16	.05
11	周囲の人とうまく調子を合わせていける。	.56	.06	.07	.31
6	目上の人言うことや伝統は, 尊重したいと思う。	.06	.73	.18	.16
13	古くからの慣習や伝統的儀式に従うことにさほど抵抗を感じない。	.06	.63	-.08	.02
12	みんなで決めた事にはたとえ自分の主義に反していても従う。	.15	.37	.07	.32
9	誰にも暖かい気持ちで接するようにしている。	.30	.40	.23	.39
5	他人の忠告には素直に耳を傾ける。	.14	.04	.71	.40
4	迷った時は進んで人に助言を求める。	.13	-.07	.56	.15
10	まわりと自分の考えとがくい違う時はまず先に自分を疑ってみる。	.09	.35	.39	.13
7	心から尊敬できる人を何人か知っている。	.02	.23	.36	-.05
15	仕事の際人にいろいろ指図されても腹が立つことはない。	.02	.09	.09	.56
5	自分の気にさわるような事を言う友達でも許せる。	-.00	.07	.19	.52
14	不幸な人のことを見聞きするとすぐ心が痛む。	.02	.10	.06	.12
18	他人の役に立ち喜んでもらえることが何よりの喜びである。	.23	.24	.18	.24
CONTRIBUTION (%)		25.2	11.9	8.3	7.2

TABLE 4 分離性(S)尺度 因子分析結果 (VARIMAX 回転後上位4因子の負荷量)

No.	項目の概要	S1	S2	S3	S4
2	他人が自分をどう思おうとあまり気にならない。	.77	.02	.25	.11
3	日常のささいな出来事や人間関係にあまり心をわずらわせない。	.67	.06	.14	.01
1	大体的場合自分で決断した以上後で悩むことをしない。	.56	.15	.15	.17
22	社会通念や伝統、経験にとらわれない行動や考え方ができる。	.41	.21	.26	.18
25	政治、経済に関心が強い。	.12	.57	-.05	-.04
15	私は難しいことがらに挑んでいくのが好きである。	.02	.52	.26	.15
18	身近の事にとらわれず社会的に広い視野を持とうと努めている。	.10	.53	.08	.06
23	ささやかな幸せの中にぬくぬくと安住していたくない。	.25	.51	.15	.13
12	科学、技術の世界に関心を持っている。	.12	.42	-.08	.04
21	課題をやる場合には全体を見てその場のことだけに縛られない。	.02	.40	.18	.30
19	目上の人とも遠慮なく議論することがある。	.11	.53	.37	-.02
16	自分の権利ははっきりと主張する。	.09	.16	.66	.29
4	まわりと意見が違っても正しいと思った事ははっきり主張する。	.17	.25	.57	.04
17	私は意志が強い。	.24	.09	.48	.11
6	正しいと思うことは人にかまわず実行する。	.28	-.01	.47	-.01
5	自分で一度決心したら 人から言われてもなかなか変えない。	.35	.08	.44	.18
8	結局頼れるのは自分自身でしかないと思う。	.13	.08	.14	.71
7	他人に甘えた感情を持ちたくない。	.39	.05	-.02	.44
20	非合理的な考えや根拠のあいまいな意見には納得しない。	.06	.16	.28	.37
10	やるべき仕事についてはきちんと計画を立てるようにしている。	-.03	.15	.12	.00
CONTRIBUTION (%)		25.7	10.2	7.1	6.4

注) No. は尺度内での並び項で実際には両尺度項目こみにして Lie 尺度5項目を含めて配列された

すべての群に比して高いことが t 検定の結果からも 0.1%以下の水準で有意に認められる。HS2についてはSレベルの主効果(F(2,157)=3.443 p<.05) およびUレベルとSレベルの交互作用の効果(F(4,151)=2.887 p<.05)が有意であった。FIG.5よりレベルが中間以上(M・H)の場合ほぼSレベルの上昇に伴い得点が高くなっているがUレベルが低い(L)場合はグラフが逆V字型となっており、Sレベルが高い(H)場合、逆に中間(M)の時より低くなっていることがわかる。分析1②の結果より、HS1を危機の次元、HS2を関与の次元と解釈すれば、以上の結果から、危機を経て達成へ、というEriksonのモデルを一体性、分離性2面の相対的レベルの違いない

しその変容という次元により、以下のように捉え直すことができよう。

即ちまず、一体性のレベルが一定以上強く分離性よりも比重の大きいパターン(HL, HM, ML)は、危機の経過、積極的関与の2つの基準を満たさぬ、より初期の未熟な段階とみなし得る。同一性確立の過程では、そういったパターンから一体性のレベルが一定以上強くしかも分離性の方が比重の大きいパターン(MH, HH)への転換がおこる。

この過程について例えばFIG.3, 4, 5よりHMがMM, HLに比して危機・関与の両次元ともに特に進んでいるとはいえ、一方LMは関与の次元のみ見ればHM, MM及びHLに比しても高いことから、その初期にはいったん一体性が低下し分離性の相対的比重が高まることによりその強化が促進される、という経路をたどることが予想される。一体

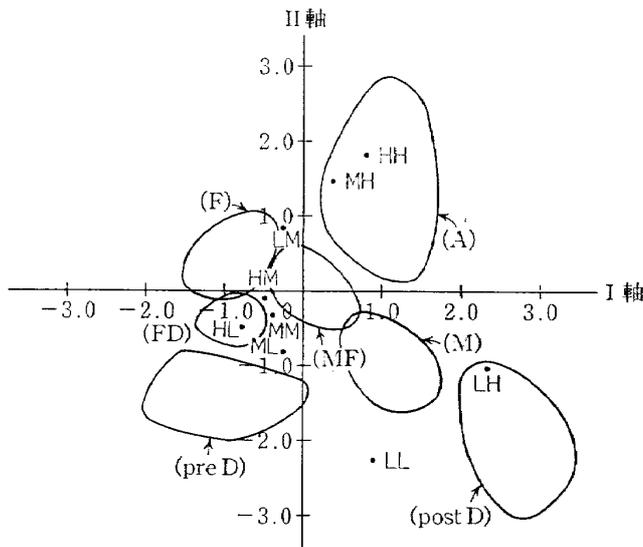


FIG. 3 USレベルを要因に加えた自我同一性パターンの抽出 (()はパターンの名称)

するウェイトに基づいて得られたカテゴリーパターンにも大きな変化のないことが確かめられた(FIG.3)。そこでさらにその関連性を詳しく検討するため、分析1②で得た林数量化Ⅲ類による個人の第1因子得点(HS1)、第2因子得点(HS2)それぞれについて、U得点レベル(3)×S得点レベル(3)の2要因分散分析を行った。HS1についてはSレベルの主効果のみ有意(F(2,157)=4.393, p<.05)であった。FIG.4より特にU得点レベルが低く、S得点レベルの高い群(LH)がLLとHHとを除く

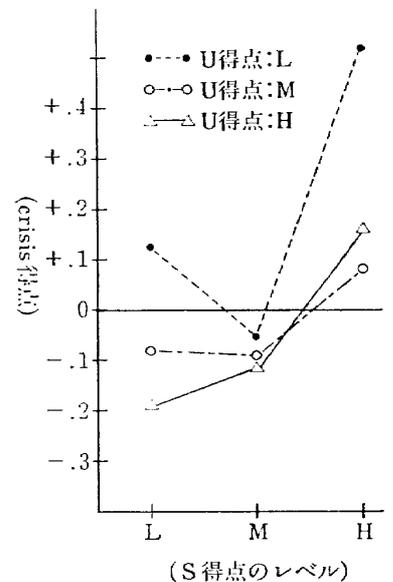


FIG. 4 Crisis 得点に対するU得点, S得点レベルの関係

性が低くしかも分離性も未熟であるとみなされる LL は、位置づけとしてはこの転換の初期にあると解され、また危機次元で中間程度、関与の次元では特に低いことから、同一性の葛藤感の殊に強い状況にあることが推測される。一方、分離性が一面的に強化され一体性との比重のずれが特に大きいと解される LH には、危機の次元で特に高く関与の次元も低いという同一性拡散的

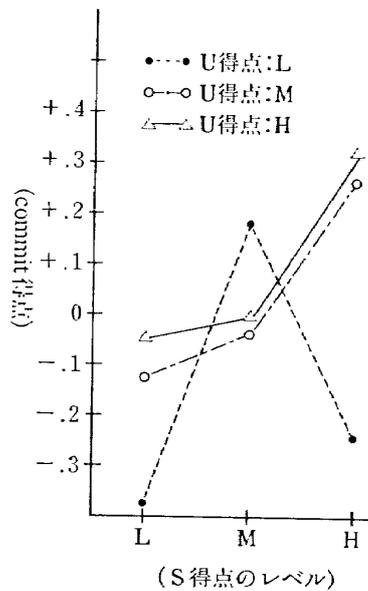


FIG. 5 Commit 得点に対するU得点, S得点レベルの関係

特徴が認められ、この経路に伴う拡散の危機は、少なくとも最終的には一体性が再び分離性に統合されてのりこえられるものであることが示唆されると思われる。

次いで個人を HS1・HS2 に基づき A, F, FD, pre D, M+D, 及び MF 地位に分類し (Fig. 6) 地位ごとの得点形態を比較した (TABLE 5)*。分散分析の結果 S

得点について、地位の有意な主効果が認められた (F (5, 108) = 3.359, p < .01)。得点の高い順に A, MD, MF, FD, F, pre D で、ライアンの多重比較の結果 (5%水準), A地位対 pre D地位, A地位対 F地位の差が有意であった。U得点には地位の

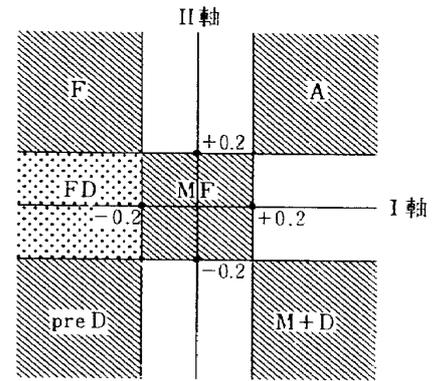


FIG. 6 同一性タイプ分けの基準
注) この基準により160名中114名が何れかのタイプに含まれ、分析の対象となった。

効果は認められず、わずかに危機の有 (A, MD) 無 (F, FD, pre D) の効果が示唆されたが有意ではなかった (F (1, 86) = 3.395 .05 < p < .1)。さらに同一性地位ごとの特徴をもう少し詳しくみるために、因子スコア別の得点を t 検定により比較した。まず、比較的 US 両得点水準の類似していた M+D と A についてみると、Aタイプは社会的達成への指向性が強く (S2) 伝統的規範への従順性は強くない (U2) 一方、他者の優れた点を積極的に取り入れようとする柔軟性を持つこと (U3) が示唆されるの

TABLE 5 同一性地位タイプ別U尺度・S尺度得点の平均値とその比較

タイプ(人)	U得点	S得点	U1 注2)	U2	U3	U4	S1	S2	S3	S4
A 17 (SD.)	36.71 (8.293)	47.65 (11.575)	-.147 (0.865)	-.371 (0.884)	.255 (0.639)	-.174 (0.925)	.112 (0.687)	.571 (0.565)	.185 (0.979)	.103 (0.657)
F 9 (SD.)	36.78 (4.983)	35.00 (7.165)	-.124 (0.599)	.212 (0.716)	-.197 (0.610)	-.150 (0.539)	-.248 (0.470)	-.021 (0.670)	-.253 (0.863)	-.037 (0.689)
MF 27 (SD.)	37.37 (7.434)	38.74 (9.924)	.111 (0.924)	-.040 (0.682)	-.113 (0.843)	.255 (0.842)	-.040 (0.756)	-.048 (0.665)	-.289 (0.919)	-.270 (0.725)
MD 17 (SD.) 注1)	34.70 (9.253)	40.94 (13.378)	-.514 (0.966)	-.061 (1.264)	-.213 (1.038)	.068 (0.718)	-.062 (0.934)	-.102 (0.978)	.324 (0.942)	-.021 (0.761)
FD 33 (SD.)	39.79 (6.299)	37.48 (9.711)	.119 (0.742)	.173 (0.655)	.001 (0.777)	.052 (0.513)	-.165 (0.637)	-.325 (0.665)	.026 (0.761)	.203 (0.541)
pre D 11 (SD.)	38.36 (10.898)	33.36 (7.865)	.287 (0.740)	.432 (0.675)	-.164 (0.959)	-.198 (0.794)	-.209 (1.119)	-.530 (0.991)	-.393 (1.339)	-.202 (0.874)
t 検定結果 (有意差の認められたもの)	FD-MD* FD-A Δ	A-preD** A-F** A-FD** A-MF**	pre D -MD*	pre D -A* FD-A* pre D -MFΔ	A-FΔ			A -pre D** A-FD** A-MD* A-MF** A-F*	MD-MFΔ	FD-MF*

注1) MD は、M+D タイプを示す Δp < .10 *p < .05 **p < .01

注2) U1 対人関係の円滑さ: U2 社会的順応: U3 選択的同化: U4 他者受容 / S1 自己分離: S2 社会的能動性: S3 自己主張: S4 未分化性の克服

* Mタイプと post D タイプは区別し難かったので1つにまとめ M+D とした。

に対し、M+Dタイプでは自己主張が強く(S3)他者から孤立しがちであること(U1)が伺われ、また全地位中このM+DにのみU・S両得点間に負の相関傾向が認められた($r = -.380$ $p < .10$)結果ともあわせ、両地位の性質の差異が示される。この2地位と対照的な得点パターンを持つpre D地位には、身近な対人関係における適応性、順応性は高い(U1, U2)がその中に埋没し個としての意識はあいまいで未熟である(S2, S3)ことが示されたが、FD地位においては受動性、無関心さという特徴(S2)と、他者への依存感情を断とうという意識の強さ(S4)とが共存していることが示唆された。これは意識レベルにとどまる質問紙の限界を示すものかもしれないが、また、独立性は依存性の反対概念ではなく依存性が適切に発達した結果の形態として捉えられるものであるという知見(高橋 1968)を間接的に支持する結果とも思われる。F地位、MF地位には特に明確な特徴は得られなかった。なお、領域ごとの地位についても、US両得点のそれぞれに対し分散分析を行ったところ〔性〕では両得点に関して有意な主効果が認められ、続いて行った傾倒と危機の2要因分散分析においては両要因の主効果及び交互作用のすべてに有意性が認められた(US両得点とも全て $p < .001$)。危機前(F, pre D)での<U高S低>という得点形態と危機後(A, post D)の<U低S高>という得点形態の対照が明確に認められるが、危機後地位の中では肯定的Aは両性的Aやpost DほどU得点の低さなishS得点の高さが極端でなかった。〔ライフプラン〕ではU得点に関する傾倒の主効果のみ認められ、結婚に対して傾倒を持つ地位が、持たない地位よりU得点が高いことが示唆された。〔母との相互性〕〔価値観〕の2領域では地位の効果は有意ではなかった。

結果のまとめと今後の課題

本研究は、青年後期女子の自我同一性について検討し、特に、自我の指向性の二側面の発達という次元からその諸相を捉え直すことを目的とするものであった。主な結果をまとめると以下のとおりである。

まず、様々な領域における問題に対する対処及び関与の仕方は、領域を通じてパターンをなすことが示唆された。各領域のStatusは個人内で必ずしも並行的なものでなく、かなりのズレを持つものも多いという事実から、全体的同一性地位という類型化の妥当性については批判的な声もある(Waterman, 1971; Schenkel, 1975)が、ここでの結果は、全体的同一性は1つのゲシュタルト的性質を持つものとして把握される、とするMarciaの前提を支持するものと思われる。さらに、全体的同一性パター

ンにおける各地位の対応性(Fig. 1)、及び一体性・分離性との関連性の強さ(分析2)からは、特に性における同一性の在り方が全体的同一性の様相の中でも重要な位置を占めていることが示唆され、この領域の重要性が確認されたと考えられる。ただし同一性危機は、Marciaの重視した職業や社会的イデオロギーといった、いかえれば社会システムの固定的なものというよりも、個々の心理人格的レベルで把握される性質のものようであった。このことは、社会的にはモラトリアムにあるがそのことが比較的自然に受けとめられ、役割選択を迫られているという深刻さや危機性のほとんど感じられないタイプ(MF)や、自分自身や社会への関心や意欲に乏しいようであるが将来の展望についての関与はいくらかみられるタイプ(FD)などMarciaの設定した基準、地位によって把握しきれないタイプの存在が示され、しかもそれらにあたる者の数は相対的に多いようであったことから推測される。またこれらの結果は、危機の有無、傾倒の有無、という2分法的類型化が、少なくとも日本人であり女性である本研究の対象大学生の同一性を把握する場合、十分とは言えないことを示唆すると思われる。

次いで、一体性、分離性という構成概念を用いて自我の指向性の二側面に視点をあて、両次元の発達のありかたの違いという観点から自我同一性の諸相を把握すること、及びその有効性が検討された。青年期の中でも限られた大学生期が対象とされたが、同一性の発達の諸相には比較的大きな個人差がみられ、これより、自我同一性の発達過程は両次元の単なる量的増大ではなく両者の相対的比重関係をも含むより複雑な過程であること、しかし大づかみにいえばほぼ以下のように描写されるものであることが推察された。即ち、「青年期における自我同一性の危機は、一般にまず自我の一体性の相対的比重の大きな状態からその比重が徐々に低下し、逆に分離性の比重が増していく過程として捉えられる。しかしさらにその危機が達成に向かうか、もしくは拡散へと向かうかの決め手となるのは、一体性の回復と両者の統合ということにある。」ただしその時期や危機そのものの深刻さについては個人差があり、いくつかバイパス的な経路もあると考えられよう。

しかし、以上は1つの作業仮説、示唆の域を出るものでなく、さらに対象を広げその検討と精緻化を進めていくことが必要であることは言うまでもない。例えば個々に検討した場合、先のモデルにあてはめにくい例も多く、こうした差異をうみだすと考えられる、現在の自我の二面性の発達のあり方の背景にある要因、及びそのような個人の自我発達レベルの要因と、社会的、対人的要因が

どのように作用しあつて現在の同一性の様相を規定するのかという問題は、今後より綿密に検討し明らかにされるべき課題であると思われる。さらにまた青年期の自我発達と同一性形成のあり方が、青年期以降、結婚、子育て、ならびに就業などの問題とも絡まりながらどのような展開をみせるのか、について長期的、縦断的視点がぜひとも必要であると考えられる。

最後に、自我指向性の二面性とは、言いかえれば人間が集団的存在様式を持つ種でありながら、同時に自立と個別化の課題を担う個性的存在であるという、人間存在の二律排反性(梶田, 1980)とも言うべきものである。

殊に人格性に関する発達の差異と個々の独自性ということは、男女に拘らず、普遍性をもつ全体的発達の視点に立ってこそ明らかにされうるものと考えられ、自我の指向性という概念による人格の二面性の次元の導入は、その1つの試みでもある。

引用文献

- 秋津慶子・伊藤裕子 1983 青年期における性役割及び性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146—151.
- Archer, S.L. 1985 Career or/and Family—The Identity Process of Adolescent Girls, *Journal of Youth & Society* 16—3, 289—313.
- 東清和・小倉千加子共著 1986 性役割の心理 大日本図書
- Block, J.H. 1973 Conceptions of sex role: Some cross-cultural and longitudinal perspectives. *American Psychologist*, 28, 512—526.
- Bourne, E. 1978 The state of research on ego identity A review and appraisal I, II. *Journal of Youth & Adolescence*, 7, 223—251, 371—392.
- エリクソン E.H. 小此木啓吾(訳) 1977 自我同一性 誠信書房 (Erikson, E.H. 1959 Identity and the Life Cycle, Psychological Issues No. 1 Monograph 1)
- Hodgson, J.W. & Fisher, J.L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth & Adolescence*, 8, 37—50.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1—11.
- Josselson, R.L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth & Adolescence*, 2, 3—52.
- 梶田毅一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知(Ⅲ)—女子学生青年を中心として— 教育心理学研究, 22, 205—215.
- 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 351—358.
- Marcia, J.E. & Friedman 1970 Ego identity status in college women. *Journal of Personality*, 38—2, 249—263.
- Marcia, J.E. Identity in adolescence. In J. Adolson (Ed.), *Handbook of Adolescent Psychology*. New York: Wiley.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178—187.
- 中西信男 1983 青年期の自我同一性地位に関する研究 大阪大学人間科学部創立10周年記念論集 397—453.
- ノイマン, E. 松代洋一・鎌田輝男(訳) 1980 女性の深層 紀伊国屋書店 (Neumann, E. 1953 Zur Psychologie des Weiblichen. Rasser & CIE, AG, Zurich)
- O'Connel, A.N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675—688.
- Orlofsky, J.L. 1977 Sex Role Orientation, Identity Formation, and Self-esteem in College Men and Women. *Sex Roles*, 3, 561—575.
- 小柳茂子 1981 「自我同一性地位面接」における女子の自我同一性の研究 その1 日教心第23回総会論文集, 454—455.
- 小柳茂子 1982 「自我同一性地位面接」における女子の自我同一性の研究 その2 日教心第24回総会論文集, 144—145
- Schenkel, S. 1975 Relationship among ego identity status, field independence and traditional femininity. *Journal of Youth & Adolescence*, 4, 73—82.
- 園田雅代 1981 女子大学生における自我同一性研究—理論的考察と実証的検討— 玉川大学文学部「論叢」 21, 319—368.
- 高橋裕行 1984 自我同一性と Marcia の同一性地位面接の批評的展望 教育心理学研究, 32, 320—327.
- 高橋恵子 1968 女子青年における依存性の発達 依田

新(編)現代青年の人格形成 第2章 金子嘗房
 鎌幹八郎 1983 ライフサイクルにおける男と女 河合
 隼雄(編)岩波講座 精神の科学6 ライフサイク
 ル 9章 岩波書店
 鎌幹八郎・山本力・宮下一博(共編)1984 シンポジア
 ム青年期3 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ
 氏原寛 1986 ユング, C. G. 村井潤一(編)別冊発
 達4 発達の理論をきづく ミネルヴァ書房 33-
 57.
 Waterman, A.S. & Waterman, C.K. 1971 A long-
 itudinal study of changes in ego identity status
 during the freshman year at college. *Develop-
 mental Psychology*, 5, 167-173.
 山本里花 1987 後青年期の女性の自己形成過程に関す
 る研究 人格の2側面 一一体性・分離性一を捉え
 る試み 日本教育心理学会第29回総会論文 集, 256
 -257.

付 記

本論文は1986年度奈良女子大学大学院文学研究科に提
 出した修士論文の一部に加筆修正したものです。研究に
 あたり御指導下さいました奈良女子大学村井潤一教授,
 土居道栄助教授, 川口潤助手, 並びに玉川大学園田雅代
 先生, 筑波大学小柳茂子先生に, 深く感謝致します。ま
 た被験者のお世話を頂いた甲子園短大井上桂子先生, 奈
 良佐保女学院短大伊吹昌男先生, 生田貞子先生, また最
 後となりましたが本論文について貴重な御助言と御批判
 を頂いた, 大阪大学中西信男教授, 梶田叡一助教授の各
 位に厚く御礼申し上げます。

(1987年10月26日受稿)

付録 四領域の危機と傾倒の主なチェックポイント

	危 機	傾 倒
性	社会一般あるいは両親の 価値観に疑問を抱き反発し たことがあるか, または女 に生まれてこなければよか ったと真剣に悩んだことが あるか 自分にとっての女らし さ, 女であることを吟味し たことがあるか 性についての基準を真剣 に模索したことがあるか	自分が女性であることを ポジティブに受け容れてい るか 何らかの性役割観を持つ か, 又それを支持する理由 を持つか 婚前交渉について安定し た自己基準に基づく考えを 持つか
母との 相互性	母の生き方考え方に疑問 や反発を抱き抵抗した, あ るいは母の影響下から抜け 出そうと苦心したことがあ るか 自己と対比させて母の在 り方に疑問を抱きそれにつ いて考えたことがあるか (母の欠点への気付きとか 母に隠し事をするようにな ったという意味でなく, 自 分らしさの自覚によって生 じた母への問い掛けを意味 する)	情緒的交流を持つか 相互的に係わりようとして いるか(性格, 生き方, 価 値観に共感するポジティブ な同一視)母との関係に確 信を持つ(のようになって いくだろうと満足し信じて いる, あるいは自分と異な る価値観を持つ母親を認め た上で, 対等で独立した関 係を築いている)
価値観	自分にとって一番大切な 価値は何かということにつ いて模索したことがある か, 現在のように考えるよ うになった契機はあるか その価値を支持すること に確信が持てなくなったこ とはあるか 人や本から影響を受けた ことがあるか 両親の価値観や本人への 期待をどう捉えているか	何らかの価値観(信念, 基本方針, 人生観)を持つ か 変えてもよいと思うか 変えるとすればどんな場合 か 人と価値観, 人生観につ いて論ずることがあるか
*(職 業)	何の職業に就きたいか決 定しようとしたことがある か 他のものを考慮したか, またはその職業についての 自分なりの意味を模索して きたか 一になることについて確 信を持てなくなったことは あるか, どのようにそれを 克服したか 両親の期待を自分なりに 捉え直してきているか	何の職業に就きたいか明 言できるか 一になるのに必要なも の, 仕事上での日常生活が わかっているか 容易に変えることを嫌が るか
(結 婚)	結婚問題について具体的 に考えたことがあるか 自分にとっての結婚の意 味, 意義を吟味した, また は模索したことがあるか 両親の期待を自分なりに 捉え直してきているか	結婚することを望む, ま たはそうなるだろうと確信 しているか 何らかの結婚観, 家庭観 を持つか, または明らかな モデルがありそのようにな るだろうと確信しているか

* <ライフプラン>は(職業)(結婚)の総合判定による